Ф. И. チュッチェフ政治詩試訳（補遺）

大　矢　　温

はじめに

すでに14回にわたってチュッチェフの詩作から彼の政治思想やその背景となる哲学を反映していると思われる詩を選び、2002年から刊行が始まった６巻本のチュッチェフ全集[1]をテキストに、分析を進めてきた[2]。その際、主に対象にしたのは、帝政ロシア時代に出版されたブィコフ編集のチュッチェフ全集[3]において「政治詩」として分類されているもの、およびソ連邦崩壊直後に出版されたザマレーエフ他編集の選集『ロシア哲学詩』[4]に所収されているもの、そして作業の途中、2002年に出版されたタラソフ編集の選集『ロシアと西洋』[5]に「哲学詩」として分類されているものである。

当初は大学院の授業で取り上げたものに若干の筆を加えて院生諸君との共訳という形で作業を進めてきたが、諸般の事情により、2008年の「Ф. И. チュッチェフ政治詩試訳(6)」以降は大矢が単独で作業を進めた。当初の目論見よりもはるかに大量の詩を分析することになったが、それはそれだけチュッチェフが政治的な詩人であった、ということの証左であろう。

作業を進めるに従って、誤訳を訂正する必要性、および後から得られた知見によって解釈を訂正する必要性にせまられた。己の不明を恥じ入るしかないのだが、それらを「補遺」としてまとめることが義務と考え、本稿とした。

海と懸崖[6]

第2聯目に誤訳があった。8行目、Мирозданью современный, の современный は与格を採って「～と同時代の」という意味なので、ここは「宇宙と同時代の」という意味で解釈しなければならなかった。

荒れ狂った寄せ波となって
　Волн неистовых прибоем
海の波は絶え間なく
　Беспрерывно вал морской
咆吼、吹鳴、金切り声、唸り声とともに
　С ревом, свистом, визгом, воем
岸の懸壁を打っている、――
　Бьет в утес береговой, –
だが、波の戯言には襲われなかった
　Но, спокойный и надменный,
泰然で尊大な、
　Дурью волн не обуян,
不動で、不変の、
　Неподвижный, неизменный,
宇宙と共に古い、
　Мирозданью современный,
お前は立っている、我らが巨人よ！
　Ты стоишь, наш великан!

ルーシの地理[7]

第１聯目３行目の「割替地 предел」が訳せていなかった。言うまでもなく、割替地とは農奴改革以前の農村共同体の慣行によって、共同体のメンバーに割り当てられる耕作地のことである。ここではルーシの正当な、権利のある版図という意味でチュッチェフは「割替地」という単語を使っている。

この聯の最後「それらの運命は明らかにされる」は、この詩の最後の「聖霊が予見し、ダニイルが予言したごとく」に対応しているが、神意の運命が予め定まっていて、何らかの手段でそれを知ることが出来る、というのがチュッチェフの思想の根底にあるように思われる[8]。50年代前半にチュッチェフがスピリチズムに熱中したのも、そのような手段としてスピリチズムを捉えていたからである。このように考えると、最後の「ダニイルが予言したごとく」の一節は、単に旧約聖書の故事を引き合いに出しているのではなく、スピリチズムの席に「ダニイルの聖霊」が降霊したと信じ込んだチュッチェフの思い込み、ということになる。

モスクワも、ペトロの都も、コンスタンチウスの都も―
　Москва и Град Петров, и Константинов Град —
これぞ皇国ルーシ遺贈の**首都**…
　Вот царства Русского заветные Столицы...
だがその割替地はいずこ？そしてその境はいずこ―
　Но где предел ему? и где его границы —
北の、東の、南の、日没する方の…？
　На север, на восток, на юг и на закат?..
来るべき時代にそれらの運命は明らかにされる…
　Грядущим временам судьбы их обличат...

スラヴ人たちに[9]

1867年にモスクワで開催された民俗博覧会とそれに合わせて開催されたモスクワ第１回スラヴ会議に招待されたスラヴの「客人」をもてなす歓迎宴会に合わせて作られた詩である[10]。

第３聯目の最後の２行が読み込めていなかった。ここでの прощать の用法は与格が「許される」対象、対格が「許される」内容であった。(Они) прощают вам Россию →прощается вам Россия となり、スラヴ人たちは「ロシア」という罪が故に許されず、ロシアは「あなた方」という罪が故に赦されないことになる[11]。

敵意に満ちた運命によって
　Хотя враждебною судьбиной
我等は四散させられたが、
　И были мы разлучены,
それでも、我等は同じ民族、
　Но все же мы народ единый,
同じ母親の息子；
　Единой матери сыны;
それでも我等は血を分けた兄弟。
　Но все же братья мы родные.
このことこそが、我等が嫌われている理由だ：
　Вот, вот что ненавидят в нас:
ロシアが故にあなた方は赦されない、
　Вам не прощается Россия,
あなた方の故にロシアは赦されない！
　России не прощают вас!

第 7 聯目に誤訳があった。

我々の間には―小さからぬ恥がある―
　А между нас — позор немалый, —
スラヴの中で、全ての血をわけた仲間の中で、
　В славянской, всем родной среде,
そいつだけが奴らの失寵を免れた
　Лишь тот ушел от их опалы
そして、奴らの敵意に曝されなかった。
　И не подвергся их вражде,
身内にとっていつでもどこでも
　Кто для своих всегда и всюду
一番の悪役だったそいつが、だ：
　Злодеем был передовым:
奴らは我等の**ユダ**だけに
　Они лишь нашего Иуду
その口づけで敬意を表す。
　Честят лобзанием своим.

第 8 聯目の最初に 2 行に племя と народ という単語が出てくる。これらの単語のチュッチェフの使い方では、国家を形成するなど自治権を持っている集団を народ と呼び、自治権を持っていない集団を племя と呼んでいるようなので、訳語としてはそれぞれ、「民族」と「種族」を当てた[12]。当時はまだ民族概念が確立していなかったので、用法にぶれがあるにしろ、「人種」は生物学的な概念なので適当ではない。「民族」については、「無題（Уже третий год беснуются языки）」においても языки を「諸民族」と訳したが[13]、この詩の第 2 連目 3 行目の「外国語政権の Иноязыческих влестей」という表現も「異民族の支配」という意味であろう[14]。

失寵の世界的種族よ、

Опально-мировое племя,

汝が民族となるのはいつなのか？

Когда же будешь ты народ?

最後の２行はアレクサンドルⅡ世を「解放帝」とスラヴの人々が称える、との意味であるが、それがはっきりと訳されていなかった。

そして『解放帝』との声は

И слово «Царь-Освободитель»

ルーシの境を超えるのだ。

За русский выступит предел.

スラヴ人たちに[15]

上記の「スラヴ人たちに」がペテルブルクの歓迎宴会で朗読されたのに対して、こちらはモスクワのスラヴ人会議で朗読された方の「スラヴ人たちに」である。「壁」の意味を取り間違えたために混乱した訳を付けてしまった。ここに訂正しておきたい。オーストリア帝国内のスラヴ民族を圧迫すべし、という文脈で語られたオーストリア外相の「壁に追い詰めなければならない」という発言を逆手にとって、チュッチェフはスラヴ民族を「ロシアの壁」の内側に取り込もう、と呼びかけているのである。

ドイツ人がスラヴ人を迫害しようと「壁」に追い詰めると、その「壁」は門を開いてスラヴ人を招き入れるのみならず、「恐ろしく弾力がある」ので今度はドイツ人に向かって膨張していくのだ。

上述ペテルブルクの「スラヴ人たちへ」がどちらかというとスラヴ内部の問題をテーマにしているのに対して、このモスクワの「スラヴ人たちに」は汎スラヴ主義による汎ゲルマン主義への対抗がテーマになっている。

奴らは叫んでいる。奴らは脅している：

Они кричат, они грозятся:

《さあ、スラヴ人を壁に追い詰めよう！》

«Вот к стенке мы славян прижмем!»

奴らがいかに消耗しようとも

Ну, как бы им не оборваться

血気にはやったその強襲において！・・・

В задорном натиске своем!..

そう。壁が―大きな壁が―ある

Да, стенка есть — стена большая,—

あなた方を壁に追い詰めることは簡単だ。

И вас не трудно к ней прижать.

ではいったい奴らにどんな利益があるのか？

Да польза-то для них какая?

まさにこれが推りがたいことなのだ。

Вот, вот что трудно угадать.

その壁は恐ろしく弾力がある、

Ужасно та стена упруга,

花崗岩の岩壁だけれども、―

Хоть и гранитная скала, —

それは地球の６分の１を[16]

Шестую часть земного круга

とっくの昔から囲んでいる…

Она давно уж обошла...

一度ならず壁は襲撃された…

Ее не раз и штурмовали —

ところどころで３つばかりの石が崩された[17]、

Кой-где сорвали камня три,

だが、最後には、後退してしまった

Но напоследок отступали

割れた勇者の額と共に…

С разбитым лбом богатыри...

壁はかつて立っていたように、立っている、

Стоит она, как и стояла,

戦の砦のように見える：

Твердыней смотрит боевой:

それは脅すためではない、

Она не то чтоб угрожала,

が…その中の石一つ一つが生きている。

Но... каждый камень в ней живой.

だから凶暴な攻撃で

Так пусть же с бешеным напором

ドイツ人にあなた方を追い詰めさせよ

Теснят вас немцы и прижмут

壁の銃眼へ、城門へ—

К ее бойницам и затворам, —

そして見よう。奴らが何を得るかを！

Посмотрим, что они возьмут!

盲目的な敵意をいかに激怒させようとも、
　Как ни бесись вражда слепая,
彼らの狼藉がいかにあなた方を脅かそうとも—
　Как ни грози вам буйство их —
親族の壁はあなた方を引き渡さない、
　Не выдаст вас стена родная,
それは身内を遠ざけない。
　Не оттолкнет она своих.

それはあなた方の前に道を開く
　Она расступится пред вами
そして、あなた方のための生きた砦として、
　И, как живой для вас оплот,
あなた方と敵との間に立つ
　Меж вами станет и врагами
そして奴らの方へと迫っていくのだ。
　И к ним поближе подойдет.

無題（Над русской Вильной стародавной）[18]

リトアニアの宗教史を深く調べていなかったので解釈が浅かった。

1346年にヴィリニュスに開基されたペレチステンスキー聖堂[19]が1868年に再建されているので、ヴィリニュスでチュッチェフが再建直後の聖堂を訪れた際の感動を詠ったものと理解できる。正教の伝統が再建されたことを言祝ぐ気持ちで詠んだ詩である。

この詩においてチュッチェフは、リトアニアのヴィリニュスを「ルーシの旧きヴィリナの上で」と、ルーシの一部として謳っている。これは当時のロシアの保守的な歴史家がポーランド・リトアニア大公国を「西ルーシ」としてルー

シに含めていたことの影響であろう。

たしかにリヴォニア地方はすでに10世紀の末（つまり大シスマ前）にルーシ主教のもとで布教が進んでおり、さらに13世紀の中庸になるとルーシ諸公との姻戚関係が進むに従って支配層の中にも正教を信仰するものが多くなる。東方正教会の勢力圏、と言う意味では「ルーシ」である。ちなみにカトリックやユニアトが勢力を持つようになるのはその後、ポーランドの影響が強くなってからである。スラヴ協会におけるチュッチェフの同志であるギルフェルディングが[20]、最初に正教が、その後にカトリックが入ってきた、と主張しているのも、このような事情をふまえてのことであろう[21]。

ただし歴史的には、ヴィリニュスを含むリトアニア大公国が政治的・軍事的にキエフ・ルーシの版図に入ったことはなく、それどころか14世紀にはリトアニア大公国がキエフを含むウクライナ地方を併合している。ヴィリニュスは「ルーシ」ではないのだ。

しかし、教会行政組織の面から見るとヴィリニュスを「旧きルーシ」に含めることもさほど不合理ではない。周知のごとく、1448年にロシア正教会が宗教的に独立するまで、ルーシの府主教はコンスタンチノープルの配下にあり、全ルーシを管轄するキエフ府主教もコンスタンチノープル配下であった。ところが当のキエフがモンゴル・タタールによって滅ぼされ占領されると、府主教座はヴラヂーミル・スズダリ公国へ移された。これが上述のロシア正教の独立へと繋がるのだが、一方でキエフは府主教不在のまま、残されることになった。そこで旧来のキエフ府主教座の教会管区であった地域を管轄するために14世紀の初めにコンスタンチノープルによってリトアニア教会管区が置かれ、ヴィリニュスに府主教が居住した。事態を複雑にしているのはこのヴィリニュスの府主教がリトアニア大公国によるキエフ併合に伴って、「キエフ府主教」を名乗り始めたことである。キエフ・ルーシの教会の頂点たるキエフ府主教座が、政治的にはルーシには含まれないヴィリニュスに移ってしまったのである。そしてその「キエフ府主教座」が置かれた本山聖堂が上述のペレチステンスキー聖堂である。

チュッチェフは政治的・軍事的な面からではなく、宗教的な要素、および教会行政組織の面からヴィリニュスをキエフ・ルーシに含んでいるのである。「キエフ府主教座」があるのだから、当然ヴィリニュスはキエフ・ルーシである、という論法であろう。一行目の「ルーシの旧きヴィリナの上に」とはこのような歴史をふまえて書かれたと解釈すべきである。

ルーシの旧きヴィリナの上に
　Над русской Вильной стародавной
十字架がまたたく、親族の
　Родные теплются кресты,
そして銅鐘の音が、正教の
　И звоном меди православной
響き渡れり全ての高みに。
　Все огласились высоты.

試練の歳月（とき）は過ぎ去りて[22]、
　Минули веки искушенья,
恐ろしき事は忘れられた—
　Забыты страшные дела —
そして忌まわしき荒廃ですら
　И даже мерзость запустенья
ここでは天国の百合となって輝いた。
　Здесь райским крином расцвела.

当初の日々の最良の
　Преданье ожило святое
聖なる伝説は蘇った[23]、
　Первоначальных лучших дней,

だがその後の過去のみが
　И только позднее былое
ここでは闇の王国の手に落ちた[24]。
　Здесь в царство отошло теней.

それ故、時にそれは動乱の
　Оттуда смутным сновиденьем
夢見となりて今もなお、
　Еще дано ему порой
皆の覚醒のその前に[25]
　Перед всеобщим пробужденьем
ここで生者の平安を乱すが定め。
　Живых тревожить здесь покой.

空から月が消える、その時に
　В тот час, как с неба месяц сходит,
肌寒き、朝ぼらけの中に
　В холодной, ранней полумгле
ふたたび何やら幻影が[26]
　Еще какой-то призрак бродит
蘇ったこの地[27]を彷徨する。
　По оживающей земле.

無題（Британский леопард）[28]

「レオパルド」、および「ライオン」が何を指すのかはっきりしなかった。「ライオン」については、これをロシア外相のゴルチャコフ公爵と考えたが、これは誤りで、タシケント占領の功によって「タシケントのライオン

Ташкентский лев」の名を与えられたミハイル・チェルニャーエフ[29]のことであろう。「レオパルド」については特定の人物ではなく、イングランド王室紋章[30]から、イギリス政府のことを指しているものと思われる。

放浪者[31]

なぜ作者が「貧しき放浪者」になったのか理解できていなかった。

若い外交官としてミュンヘンに赴任したものの、30年代前半のチュッチェフは慢性的な金欠に悩まされていた。出張旅費を目当てに、上司のГ.И.ガガーリンに頼み込んでチュッチェフはこの時期、しばしば出張に出かけている。しかも当時の貧乏な若手外交官の常として、馬車を使わずに徒歩で移動して旅費（курьерская дача）を稼いでいたのだった[32]。

無題（Не то, что мните вы）[33]

自然の中には自由があり、言葉（ロゴス）がある、というシェリング的な内容の詩であるが、チュッチェフによれば、この自然の声は人間の五感では聞き取れない。おそらくは詩情、あるいは直感によって感受するほかないのである。

雷も川も森も自然という母親から生まれた「親族」であるが、五感に関知される雷鳴によってはお互いにコミュニケートできないのだ。古代の人々が「母なる自然の書物を」「眼鏡無しではっきりと読んだ」と謳う「A.H.M.」[34]にも通じる思想である。

この世ならぬ言葉によって雷は、
　И языками неземными,
川と森を揺るがしながらも、
　Волнуя реки и леса,

夜、彼らと話し合わなかった

В ночи не совещалась с ними

親族の集まりにて！

В беседе дружеской гроза!

彼らの罪ではない：分かっておくれ、できるものなら、

Не их вина: пойми, коль может,

器官（オルガン）の働きは聾唖なのだ！

Органа жизнь глухонемой!

嗚呼、その中では魂を揺さぶらない

Увы, души в нем не встревожит

ほかならぬ母の声もまた！

И голос матери самой!

SILENTIUM![35]

この詩については、「言葉を媒介としたコミュニケーションの逆説をテーマにしている」と考え、「言語を介した合理的で機械論的な結びつきよりも主観的で有機的な結びつきを、「通じさせる」より「自ずから通じる」を重視する、ローマン主義的なモチーフである」と解説したが、シェリング哲学の影響を無視したため、この詩のテーマを狭く、コミュニケーションに限定して解釈してしまった。

チュッチェフの詩作に対するシェリング哲学、特にその「無底」の概念の影響についてはここで深く立ち入らないが[36]、シェリングの『人間的自由の本質』に見られる「無底」の概念との関係の中でこの詩を解釈すべきであった。

シェリングにとって「無底」とは、主体と客体、「我」と「彼」との区別のない原初の状態である。すべての存在はここから生まれ、存在をやめたとき、ここに帰る。チュッチェフの詩作に於いて、この「無底」は宿命的な死に場所

であると同時に、そこから生まれ出ずる母なる場所でもある。人は「無底」を恐れると同時に、それに魅せられ、そこに引きつけられるのである。

以上のことを踏まえてこの詩を読むなら、これは「我」と「彼」の二者間における「通じる」というコミュニケーションを求めているのではなく、より次元の高い、原初的一体性、「無底」への帰還を求めているものとして解釈すべきである。

これは「二つの無底の間で」まどろむ白鳥の運命を「より羨ましきはなし」と謳い[37]、「感覚を忘我のもやで／溢れるばかりに満たしておくれ！／根絶を味わわせておくれ、／まどろむ世界と混合させておくれ！」[38]と願う、「無底」に対するチュッチェフの憧憬である。

この理解が足りなかったために第３聯目の後半がはっきりしない訳になってしまった。ここは「泉」というコスモスの調和を自我によって乱すことなく、それと一体化したい、という願望が述べられているのだ。

口にされた思想は虚偽なのだ－
　Мысль изреченная есть ложь —
おまえは泉を掘り起こし、濁らせる、
　Взрывая, возмутишь ключи,
それに抱かれよ－そして黙せ…
　Питайся ими — и молчи...

無題（Когда расстроенный кредит）[39]

エカテリーナ時代の海軍提督Ｃ. Ａ. グレイクの孫のＡ. Ｃ. グレイクの無能ぶりを皮肉った詩である。

クリミア戦争直後の1857-58年に起きた信用危機は、今でこそ第一次世界金融恐慌として理解されているが、まず、世界最初の経済恐慌であったが故にこの混乱状態が続いている間は「経済恐慌」という概念自体がなかったわけで、

いわんや北米の鉄道ブームや穀物価格が複雑に連鎖した経済混乱の状況を的確に判断することは、ひとりグレイクならずとも、相当難しいことだったと想像される。

しかし、この恐慌自体は戦後復興の緒に就いたばかりのロシアに甚大な打撃を与え、つづく農奴制改革に代表される「大改革」の方向性を条件付けた決定的な事件であった[40]。それにしても、この詩を見る限り、このような大事件をチュッチェフは一官僚の無能さの問題に矮小化しているように思われる。この詩に限らず、この時期の詩作を見てもチュッチェフは、農奴制改革など、この後に控える一連の内政改革についてほとんど注意を払っていない。チュッチェフの関心はあくまでもロシアの対外政策なのだ。この点においてもチュッチェフは内政を重視するイヴァン・アクサーコフらのスラヴ主義者たちとは視点を異にする[41]。

むすび

チュッチェフの詩作に特徴的なのは、その政治性と哲学性である。特に彼の政治詩の内容は、ロシアの特殊性、スラヴ民族の団結、東西両ヨーロッパ、東西両教会の対立と最終的な統合、といった彼の40年代の一連の政論の内容と直接的に連関している。他方、哲学詩においては、自然のコスモス、自我を持った人間の一回限りの生、カオスへの没入、といったテーマが特徴的である。

おそらくこの両者をつなげるのが、シェリング哲学の「無底」の概念である。本稿でこれについて立ち入る余裕はないが、これについては、稿を改めて論じるつもりである。

注

[1] Ф. И. Тютчев: Полное собрание сочинений и письма в шести томах. Под ред. *Скатова Н. Н.* и др. Т. 1-6. М., 2002-2004.

[2] 大矢他「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(1)」、2005 年 10 月、札幌大学外国学部紀要『文化と言語』第 63 号 :「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(2)」、2006 年 3 月、同上、第 64 号 :「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(3)」、2006 年 11 月、同上、第 65 号 :「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(4)」、2007 年 3 月、同上、第 66 号 :「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(5)」、2007 年 11 月、同上、第 67 号 : 大矢「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(6)」、2008 年 3 月、同上、第 68 号 :「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(7)」、2008 年 3 月、同上、第 70 号 :「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(8)」、2009 年 3 月、同上、第 71 号 :「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(9)」、2009 年 11 月、同上、第 72 号 :「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(10)」、2010 年 11 月、同上、第 73 号 :「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(11)」、2011 年 3 月、同上、第 74 号 :「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(12)」、2011 年 11 月、同上、第 75 号 :「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(13)」、2012 年 3 月、同上、第 76 号 :「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(14)」、2012 年 11 月、同上、第 77 号。

[3] Ф. И. Тютчев: Полное собрание сочинений. Под ред. *Быкова П. В.* С-Пб. 1911.

[4] *Замалеев А. Ф.* и др. Русская философская поэзия. С-Пб., 1992.

[5] *Тарасов Б. Н.* Россия и Запад. М., 2007.

[6] 大矢他「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(1)」、83-84 頁。

[7] 同上、85 頁。

[8] 娘のアンナが妹のダリアに宛てた 1854 年 6 月 17 日付けの手紙の中で、チュッチェフの思想を伝えている。「神意（プロヴィデニエ）の予見が単なる詩的隠喩でないことを知ったなら、この世のすべてが隠された原因と目的を持っていることが分かってくるのだ。」Письмо А. Ф. Тютчевой от 17 июня 1854 г. // Литературное наследство. Т. 97. Кн. 2. С. 265.

[9] 同上、94-96 頁。

[10] スラヴ会議については、チェコ側の資料を使った研究が発表されている。川村清夫『プラハとモスクワのスラヴ会議』、中央公論事業出版、2008 年。

[11] 新約聖書に「子よ、あなたの罪は赦される прощаются тебе грехи твой」という記述がある。マルコ 2, 5。

[12] たとえば「ロシア人から（ミツケーヴィッチ氏の講義の抜粋を読んで」において、チュッチェフは、「跳ね起きよ、つながりなき種族よ/一つの**民族**へと結合せよ」と使い分けている。「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(2)」、103 頁。

[13] 同上、193 頁。

[14] とはいえ、チュッチェフにとっての日常語はフランス語だった。チュッチェフの娘婿で彼の伝記作家でもあるイヴァン・アクサーコフは、その著書の中で、チュッチェフの幼年時代について、「この十分にロシア的なチュッチェフ一家に於いて優勢であり、ほとんど支配的であったのはフランス語であった。というのも、すべての会話のみならず両親と子供、子供同士のすべての文通は、当時も今も、生涯を通じて、他ならぬフランス語で行われたのだ」と記している。*Аксаков И. С.* Биография Федра Ивановича Тютчева. М., 1886. С. 9-10.自身が家庭を持つようになってからもドイツ出身の二人の妻や子供たちとはフランス語でコミュニケートしていた。

[15] 「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(1)」、97-98 頁。

[16] 1867 年のアラスカ売却前のロシア帝国の総面積は 2000 万平方キロメートルを越えていたので地球上の陸地面積のほぼ 6 分の 1 ということになる。

17 チェコやガリツィア、ブコヴィナなどスラヴ地方の併合のことを指すのか、具体的に何を指しているのか不明。
18 「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(4)」、54-55 頁。
19 Пречистенский кафедральный собор (Кафедральный собор во имя Успения Пречистой божией Матери). Православный кафедральный собор в Вильнюс.
20 ギルフェルディングについては、イヴァン・アクサーコフによる略伝が伝えられている。*Аксаков И. С.* Речь о А. Ф. Гильфердинге, В. И. Дале и К. И. Невоструеве // Собрание сочинений. М., 1887. Т. 7. С. 784-794.
21 スラヴ学者のギルフェルディングは、リーフランドに最初にキリスト教を伝えたのはポロツク公の庇護を受けたロシア人宣教師で、その後、「剣と火によって」ローマ・カトリックが入ってきたと主張している。*Гильфердинг А.* Движение латышей и эстов в Ливонии с 1841 года // Чтение в Императорском обществе истории и древностей российских при Московском университете. М., 1865. С. 121.
22 ポーランド人の支配と解するのが自然であろう。
23 プレチステンスキー聖堂が再建されたことを指す。
24 この地がカトリックの手に落ちた、との認識である。
25 聖堂は再建されたが、正教徒の民族的自覚はまだである。
26 カトリックの影響のこと。
27 18 世紀のポーランド分割によってロシア帝国に編入され、聖堂も再建されて政治的・宗教的に「ルーシ」となったリトアニアのこと。
28 「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(4)」、63-64 頁。
29 М. Г. Черняев (1828-1898)
30 Royal coat of arms of the United Kingdom. ライオンと一角獣が盾を支えている図柄であるが、この盾の中につごう 7 匹の小さなライオンが描かれている。この小ライオンを「レオパルド」と言っているものと思われる。
31 「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(5)」、93 頁。
32 См. *Экштут С.* Тютчев: тайный советник и камергер. М., 2003. С. 66-67.
33 「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(5)」、101-102 頁。
34 同上、87-88 頁。
35 「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(7)」、94-95 頁。
36 См. *ОЯ О.* Поэтический мир Ф. И. Тютчева и философия Ф. Шеллинга. Текст доклада на XXXIV международных научных чтениях «Н. Г. Чернышевский и его эпоха». 18 октября 2012 г. Саратов.
37 「白鳥」、「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(7)」、91 頁。
38 「無題（Тени сизые смесились）」、「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(12)」、117-118 頁。
39 「Ф.И.チュッチェフ政治詩試訳(11)」、132 頁。
40 吉田浩「農奴解放の開始から大改革へ」『ロシア史研究』2012 年第 90 号、95-96 頁参照。
41 スラヴの長としてのロシアの地位を確立する前提としてロシアの内政改革を重視したイヴァン・アクサーコフについては、大矢「クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフ ― スラヴ主義から汎スラヴ主義への展開」、『文化と言語』、2005 年、第 69 号参照。

（本研究は、科研費（基盤研究(B)21330030）の助成を受けたものである。）